

地震がおきて

齋藤 健輔

No. 1
十月二十三日午後五時五十六分、とてつもなく大きなゆれがおそった。ぼくはそのとたんつくえの下にかくれた。ゆれがおさまり、
「大丈夫か！はやく家の外へ出るぞ。」
と声がきこえてきて外へでてみると、コンクリートがはがれ、車が通れなくなっていた。

その夜は車の中で一夜を過ごした。へりこ

No. 2
「ター」が何機も通っていた。

次の日に近くにある体育館へといってみると、友達がたくさんいた。でも何人かの友達がいなくて心配だった。体育館へいってすぐ余震があった。照明器具がゆれてびくくりした。みんなで毛布にくるまっておさまるのをまっていた。まだおさまらないのかと思った。
「や、ぱり車の方がいい！」
と言、て車の中へと行った。車の中の方がゆれがあまりこわくなかった。

そんな生活を送って三日後ヘリコプターに乗って長岡へ行った。その時、お父さんは乗らずにヘリコプターは飛び立った。ヘリコプターは山の上を通っていた。その時、大きくずれた山やぐれた小屋がいくつもあった。

十二月中旬から仮設住宅での生活が始まった。ぼく自身はボランティアの人と遊んではかりいた。だから楽しく生活していた。でも父母は大変だった。ぼくの家では錦鯉をかいていた。地震により半数以上の錦鯉が死んでしまった。でも父母は生き残った錦鯉を栃木県へ送ったりしたりこわれた池を見に行ったりした。でもそのことをぼくにはあまり話そうとはしなかった。それは、ぼくが心配しないようにしてくれているんだと思った。このようにいろいろなたちのおかけでぼくは今、くらしがいられるというところがこの地震でよくわかった。